慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	古典学派の崩壊と「賃労働」分析の転換：リカード学派
Sub Title	The analysis of the Lohnarbeit problems in the Ricardian school
Author	井村, 喜代子
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1958
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.51, No.2 (1958. 2) ,p.138(42)- 158(62)
JaLC DOI	10.14991/001.19580201-0042
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19580201-0042

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

古典学派の崩壊と「賃労働」分析の転換

――リカード学派――

井村喜代子

第一章　リカード学派（本稿）
第二章　シーニョア（次稿）
第三章　J・S・ミル（本誌五〇巻・二号）

第一章

㈠　イギリスにおける一八二・三〇年代
㈡　リカード学派の資本主義体制の把握
――労働概念を中心として――
㈢　リカード学派の「賃労働」問題の分析
㈣　むすび

㈠　イギリスにおける一八二・三〇年代

古典学派の特徴[注1]は、労働を生産の中枢・価値の唯一の源泉として経済の基礎にすえ、この労働による価値規定にもとづいて資本制生産の内部的諸関聯＝諸法則を解明せんとしたことにある。かかる特徴は、労働の価値規定を基軸として、国富の生産・増大の機構と法則を究明していったスミスにおいて明白にうかがわれるが、つづくリカードは、スミスのなかに混在していた生産費説的視点を一掃することによって、労働価値原理を一層純化し、それを経済学体系をささえる基礎原理として一段と明確に位置づけていったのである。

しかしながら、資本制生産を自然的・絶対的なものとみた彼らにあっては、あらゆる価値・従って利潤の源泉が労働にあることが明らかであっても、何故に、またいかにして、労働が労働そのものとしては現われずに、商品・価値の生産という形態をとり、しかもその際労働生産物の一部が利潤の形態で控除されるのか、という資本制生産の特殊的・歴史的特質は注目するところとはならなかった。従ってまた、労働の主体たる労働者がみずからの労働の成果から疎外されている事情を事実上明示しながらも、そこに労資の階級対立の本質・階級対立の不可避性を認識することができなかったのである。

この限界は、価値・剰余価値とその転化形態たる生産価格・平均利潤との混同視において、あるいは労働（力）と資本との交換関係の説明において露呈され、このいわゆる「二つの難点」[注2]は、古典学派を崩壊させる直接的契機となった。だが、資本主義を絶対視する古典学派の誤りをより決定的な形で明るみにだしたのは、彼らのヴィジョンに反して成熟・深化していった資本主義固有の諸矛盾であった。

すなわち、一九世紀初頭以降、機械制大工業の飛躍的な発展に基いて、新興ブルジョアジーは旧特権階級地主を圧迫しつつ、急速に経済的・政治的支配を拡大し、古典学派の熱望した資本の自由な支配・発展を着々と実現していったが、彼らに勝利を許したこの過程は、他面では新しい矛盾と階級対立を成熟せしめる過程でもあった。[注3]

一八二五年にはじまる周期的恐慌は、資本主義が自己否定的要因をみずからの発展のうちにうみだすことを実証し、資本の発展に貢献してきた労働大衆をして「産業革命以来……最も悲惨[注4]な」状態におとしいれた。この窮乏のもとで階級的自覚をふかめた労働者は、二四年の団結禁止法廃止を契機に公然たる組織活動を開始する。もっとも、二〇年代末には、このエネルギーは急進的ブルジョアジーの指導する議会改革運動に吸引され、そこではなお労資の協調がみられるが、三二年の選挙法改正における資本家の裏切り、三四年の新救貧法の制定に激怒した労働者は、ブルジョアジーと袂をわかって、三四年、全国労働組合大連合に結集し、激しい抗争と敗北の経験を通じて、政治的自覚をふかめつつ、チャーチスト運動へとむかう。そして、「四〇年代の飢餓」[注5]とチャーチズムの動乱においては、経済的矛盾も階級的対立もまさに資本主義に本来的なものとして現われ、古典学派の階級調和的繁栄への期待はここに完全にふみにじられていったのである。

（注1）拙稿「古典学派に於ける『賃労働』問題の分析視角――アダム・スミス」（本誌四八巻一一号）、「D・リカードの『賃労働』問題の分析視角」（本誌四九巻四号）参照。
（注2）マルクス「剰余価値学説史」（改造社版）(11)二一七頁。エンゲルス「『資本論』第三巻序言」（長谷部訳「資本論」日評版(5)四四―六頁）等。
（注3）G. D. H. Cole, "A Short History of the British Working Class Movement, 1789-1947." rev. ed., 1948. J. L. & B. Hammond, "The Town Labourer 1760-1832—The New Civilisation," 1917. エンゲルス「イギリスにおける労働者階級の状態」マル・エン選集（大月版）補巻(2)等を参照。
（注4）G. D. H. Cole & R. Postgate, "The Common People, 1746-1946," 1949, p. 209.
（注5）Ibid., Chap. XXIV, "The Hungry' Forties."

さて、古典学派の労働価値論をめぐる騒然たる論争がくり開げら

れる一八二・三〇年代は、かかる新局面の成熟をもって特徴づけられるが、そこではなお諸階級の経済的・政治的関係に過渡的性格が残存していたため、理論家の課題意識も、理論の性格も、かなり複雑な様相と推移を示していた。(注1)

まず論争は「二つの難点」を形式論理的につくマルサス、ベイリーと、この難点を救おうとするリカード学派の間で火蓋がきられたが、そこでは労働価値論の限界も正当性も、きわめて形式的・皮相的に把えられ、それらを、資本主義的性格をあらわにしていった現実のなかで検討するという努力はほとんどはらわれなかった。このため労働価値論は、しだいに無内容な詭弁と堕し、生産の内部的諸関聯を洞察する基礎理論としての意義を失っていくこととなった。しかし新局面の成熟を反映して、一方では古典学派のなかから「理論的に既に準備せられたる矛盾を拾ひ上げ」(注2)ていくリカード派社会主義と、ブルジョア的立場からではあれ、資本制生産の歴史的、過渡的性格にある程度着目するラムジー、ジョーンズ等が現われる。が、他方ではブルジョア的危機意識をふかめたシーニョアが、新しい主観的分析によって資本の生産性を指摘し、利潤控除説やそれに基く社会主義的見解を頑強に否認していく。そして世紀中葉、資本主義の危機をつげる国際的動乱のなかで、もはや無視できなくなった諸矛盾を解明・打開せんとするJ・S・ミルが、古典学派体系を「生気のない折衷論」(注3)へと修正し、自由放任主義にかわって改良主義的政策をうちだし、(注4)ここに古典学派は終局的に解体していったのである。

ところで、本稿は古典学派の崩壊過程をリカード学派、シーニョア（続稿）、J・S・ミル（本誌五〇巻二号）において把えようとする研究の一環であるが、そこでの主題は、諸理論のかかる複雑な性格と変遷を個別的にふかめることそれ自体ではない。筆者の主題は、それらが個別的な特徴、相違をもちながらも、労働価値論からの逸脱・離反という共通の基盤のうえにあらたに形成・確立していった視角のなかに、共通的なものを求めることにある。つまり、新局面の成熟していく段階においてもなお、資本制生産を絶対視する古典学派のブルジョア的立場が一面的に継承されていく過程で、労働価値論に基く分析方法がいかに変質していったのか、またこの変質が「賃労働」問題の分析にいかに決定的な影響を与えていったのか、という点を右のながれのなかから摘出することである。こうした問題設定によって、古典学派の特徴と限界を再確認するとともに、他方では、一九世紀末に生じたといわれる経済学史上の大変革が、すでにこの古典学派崩壊の過程で準備されていたこと、分析用具ではなくて、より基本的な分析視角という点に注目すれば、ここにむしろ「本質的な変化」(注6)・「大分水界」(注7)が求められることを明らかにしたい。この意味でこの一聯の研究は、これまでの古典学派研究を補完するものであるとともに、新古典学派研究の序論*でもある。

* 古典学派の崩壊の一環として当然とりあげるべきリカード派社会主義、ラムジー、ジョーンズ等をのぞいたのはこの問題意識によるものであって、これらはマルクス経済学の成立の系譜において位置づけたい。

なお本稿で、J・ミルとマカロックの相違に重点をおかなかったのも、同様の理由からである。

（注1） とくにマルクス「『資本論』第二版への跋」。「剰余価値学説史」第三巻。R. L. Meek, "The Decline of Ricardian Economics in England," Economica, Feb. 1950.（吉田訳〝一ク「イギリス古典経済学」所収。）E. Roll, "A History of Economic Thought," 1938.（隅谷訳）。E. Seligman, "On Some Neglected British Economists, in Essays in Economics," 1925.（平瀬訳）。玉野井芳郎「リカアドオからマルクスへ―古典経済学批判史―」。堀経夫「リカアドウの価値論及びその批判史」。岸本誠二郎「労働価値論研究」等を参照のこと。

（注2） 「剰余価値学説史」(II)三一二頁。

（注3） マルクス「『資本論』第二版への跋」（「資本論」(1)一二六頁。）

（注4） 拙稿「古典学派の崩壊と『賃労働』分析の転換―J・S・ミル―」（本誌五〇巻二号）参照。

（注5） マルサスは、現実的課題意識、（階級的立場）、方法論、理論体系等、いずれにおいてもユニークな面をもっているばかりではなく、人口論によって一八・九世紀を通じて、「賃労働」問題の分析に強大な影響を与えたから、独自の思想・理論体系として扱う予定である。

（注6） M. Dobb, "Political Economy and Capitalism, Some Essays in Economic Tradition," 1950, p. 133. 岡訳一二七頁。

（注7） E. Roll, op. cit., 1945, pp. 371 & 2. 訳(下)一五九・一六一頁。

(二) リカード学派の資本主義体制の把握
――労働概念を中心として――

J・ミル、マカロックは、リカードの「ただ二人の真実の弟子」(注1)と自負し、その継承・擁護に努めたが、リカード理論を皮相的に解説することによって反ってそれを形骸化・無力化し、実質的にはその崩壊を促進するという皮肉な結果をもたらした。リカード体系をささえる基礎原理が労働価値規定にある以上、当然のことながら、リカードから離反した根本原因は労働把握の歪曲にあったのであり、この点はリカードのいわゆる「二つの難点」を救おうとする彼らの試みに端的に反映されている。

（注1） 一八二三年九月一九日、リカードの死にさいしての、J・ミルのマカロックへの手紙。(The Works and Correspondence of David Ricardo ed. by P. Sraffa with the Collaboration

of M.H.Dobb, Vol. IX, p. 391.)

まずリカードの第一の難点は、資本の有機的構成や回転期間の相違によって、異なる量の直接的労働が使用される場合にも、同一量の諸資本はつねに同一量の価値・利潤をうむという事態にあった。けだし、平均利潤・生産価格をはじめから与えられたものとして前提し、それらを剰余価値・価値そのものと直接に同一視したリカードでは、右の事態は投下労働による価値規定の原理と抵触すると思われたからである。[注1] これは労働が投下されない貯蔵期間中にも、何故ぶどー酒の価値が増大するかという、いわゆるぶどー酒問題として当時の論争の主要な一争点となった。ところで、右の事態のなかに労働価値論の破綻をよみとるリカード反対者[注2]に対し、リカード学派は形式的に労働価値規定を貫徹させようとするばかりで、問題の所在を感知すらしない。

まずミルによると、「生産費は諸貨物の交換価値を規制する」が、資本は「純粋の労働の結果」であるから、生産費はすべて労働に「還元される」。従って、右の命題は、投下労働による価値規定の命題と同じ内容のものである。[注3] ところで困難は利潤がこの生産費にふくまれている点にあるが、ミルは資本を蓄積労働(hoarded labour)とし、この蓄積労働＝資本を、「費用と価値の観点」からも直接的労働(immediate labour)と全く同じものとすることによって、労働価値の規定と生産費の命題を強引に結びつける。そこでは利潤は、「直接に手に依ってでなくて、手が生産した用具に依って間接的に用ひられる労働の賃銀である」といわれる。[注4]（引用文中の傍点は引用者によるもので、丸は著者のものである。以下同様。）

生産費＝｛労働（直接的労働）／資本（蓄積労働）｝……→＝労働——→価値……→｛労賃[注5]／労賃＝（利潤）｝

このように労働概念を資本にまでも拡張し、利潤をこの資本＝蓄積労働の賃銀と規定したうえで、ミルは賃銀量が直接的労働の投下量を示すごとく、利潤量は蓄積労働の投下量をはかる「尺度」[注6]であるとのべ、利潤の存在から逆に蓄積労働の支出を論証する。従ってぶどー酒の価格が貯蔵中に十分の一増加するならば、「十分の一だけより多い労働がそれに支出されたとみなされてよいだろう」[注7]ということになる。

こうしてミルは、平均利潤・生産価格という現象的諸形態を、労働による価値規定そのものから直接に説明しようとし[注8]て、「スコラ哲学的な工夫に走った」[注9]のであるが、この過程で、労働価値論の根底が歪曲されていったことに、ミルは気づかなかったのである。

ところで、労働概念の歪曲は、「J・ミルをも俗流化した」[注10]といわれるマカロックでは、より一層顕著である。彼によれば、労働は「人間、下等動物、機械、あるいは自然的諸力のいずれによってなされるかをとわず、ある望ましい結果をもたらすに役だつところのある種の行為、または作用」[注11]である。従って、ぶどー酒の価値が貯蔵中に増加するのは、「自然みずからが樽の中で行う諸過程」による

といわれながらも、この過程自体が「労働」?!とみなされる。[注12] 利潤がかかる「労働」に対する賃銀の別名にすぎないという見解もまた、彼によって最初[注13]に、大胆に表明されたのであった。

J・ミルは労働概念を資本にまで拡張したが、マカロックはさらに一歩進んで、労働の全く対象化されていない自然力にまでもそれを適用し、「労働そのものの概念を取り失って」[注14]しまったのである。ここに労働価値論はしだいに詭弁的性格を強め、形式的には労働による価値規定が終始くり返されながらも、実質的には、資本→利潤・労働→賃銀・という三位一体論が抬頭し、利潤プラス賃銀によって価値＝価格が規定されるという生産費説へと移行していったのである。[注15] このかぎりでは、マルサス、ベイリー達の批判[注16]は鋭く、かかる批判に力を与えたところに、リカード学派が労働価値論の崩壊を促したといわれるゆえんがある。

もっとも、スミスの価値論にも、「賃銀、利潤そして地代は、一さいの交換価値の根本的源泉（original source）である」[注17]という価値構成説的視角が混在していたし、リカードは価値分解説の貫徹によってかかる視角を一掃したものの、資本主義的諸範疇を自然的・絶対的なものとみる立場に制約されて、資本を生産手段そのもの・蓄積労働（accumulated labour）としたし、利潤を与えられたものとして前提し、その源泉を明確に規定することもなかった。[注18] しかし、スミスの混乱は、生産手段の私有以後では、生きた労働は同一量の対象化された労働を支配できないという貴重な認識に起因するものであったし、[注19] またリカードは労働を「社会的に決定された人間的・活動として、価値の唯一の源泉として」[注20]首尾一貫強調することによって、資本＝生産手段は単に価値を移転するにすぎず、利潤は直接的労働が生んだ価値の一部であり、従って賃銀と利潤が対抗関係にあることを、事実上はっきりと明示したのであった。

それゆえ資本と労働をともに生産の「積極的な作因」[注21]とし、資本＝蓄積労働の賃銀について語ることは、まさにリカード体系をささえる基礎の崩壊であり、ここにリカードの労働把握にたって、「資本の不生産性」を強調するホジスキンがリカード学派の逸脱を激しく攻撃するゆえんがあった。[注22]

なお労働把握についていま一つ注意すべきことは、マカロックが労働を「労役と苦心（toil and trouble）」[注23]とみるスミスの主観的な労働把握の一面を復活・拡張した点である。同一量の労働は同一量の「労役と苦心（toil and trouble）」を意味し、これは労働者につねに「同一の犠牲（sacrifice）」を課すゆえに、「同一の真実価値（real value）」をもつ。[注24] このように労働が肉体的エネルギーの支出という客観的なものとしてではなしに、主観的に感知された「苦心」・「犠牲」として把えられるならば、労働価値論も実質的には、利潤を資本家の犠牲＝節欲とし、労働を不効用とする主観的分析と非常に近いものとなっているといわねばならない。[注25]

（注1） D.Ricardo, "On the Principles of Political Econo-

my and Taxation," 3rd ed., Chap. 1, Sec. IV & V. しかしそこでは、問題が貨銀変化の資本構成・回転期間の差におよぼす影響として提起されたうえに、こうした問題は例外的とされたため、問題は解決の糸口を見出しえなかった。

（注2） マルサスは右のリカードの例外がむしろ法則であるとして、投下労働による価値規定を否認する。T. R. Malthus, "Definitions in Political Economy, preceded by an Inquiry into the Rules which ought to guide Political Economists in the Definition and Use of their Terms; with Remarks on the Deviation from these Rules in their Writings." (1st ed., 1827), 1954, pp. 26–27. 玉野井訳二八—九頁。

（注3） J. Mill, "Elements of Political Economy," (1st ed., 1821), 3rd ed., 1826, pp. 93–8. 渡辺訳八一—七頁。

（注4） Ibid., pp. 98–103. 訳八七—九一頁。

（注5） 堀経夫「前掲書」八四頁の図参照。

（注6） J. Mill, op. cit., pp. 99–102. 訳八七—九〇頁。

（注7） Ibid., 2nd ed., 1824, pp. 97–8.

（注8） もっとも、賃銀変動の生産価格へ及ぼす影響の分析（J. Mill, op. cit., 3rd ed., chap. III, sec. III.）には、マルクスの生産価格論へ示唆を与えたとも思われるユニークな着想がみられる。（堀経夫「リカアドッ学派における生産価格論」第二節参照。「正統学派経済学説研究」所収。）

（注9） 「剰余価値学説史」(9)五九頁。(11)三九頁。

（注10） 同右(11)二〇六頁。

（注11） A. Smith, "An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations," ed. by J. R. McCulloch, 1863, p. 434. (Notes and Dissertations by McCulloch)

（注12） J. R. McCulloch, "The Principles of Political Economy: With a Sketch of the Rise and Progress of the Science." 1st ed. 1825, pp. 315–8.

（注13） E. Cannan, "A History of the Theories of Production and Distribution in English Political Economy from 1776 to 1948," 1953, p. 164.

（注14） 「剰余価値学説史」(11)二二四頁。マルサスも同じくその詭弁性を嘲笑する（T. R. Malthus, op. cit., pp. 98–104. 訳七八—八二頁）。

（注15） もっとも、価値論ではマカロックも自然力が価値を創造するという見解を否定している（J. R. McCulloch, op.cit., 2nd ed., 1830, pp. 72–3.）。また利潤についても、資本＝蓄積労働が価値を、従って利潤を生産するとは直接いわれてはいない。むしろ、利潤が蓄積労働の賃銀とされる場合、利潤と、資本の価値の移転・填補部分とが混同され、填補部分をこえる利潤の形成自体が曖昧であり（J. Mill, op. cit., pp. 103–4. 訳九一—二頁）、「何故に、蓄積労働が、直接労働よりもより高い率で（消耗に対する填補部分以上に一引用者）、支払われるか」に答えていない（B. Bawerk, "Kapital und Kapitalzins," Bd. 1, "Geschichte und Kritik der Kapitalzins-Theorien," 4 Aufl., 1921, S. 264.）という論理的不充分さがめだっている。しかし資本の生産性を直接言明しなかったとしても、労働概念の曖昧化・資本＝蓄積労働の賃銀としての利潤の規定のなかに、実質的には三位一体論への移行がうかがわれる。

また、部分的には、前払いされた労働よりより多量の労働生産物が獲得される点に利潤の発生を求める見解もみられる（J. Mill, op. cit., p. 104. 訳九二頁。J. R. McCulloch, op. cit., p. 298.）が、彼らがリカード擁護者と自負する以上、形式的・部分的に、リカード命題が継承されているのはむしろ当然であろう。だが問題は、実質的にその意義が正しく認識され、全体系を貫いているかいないかにあり、この意味では彼らの実質的逸脱を強調することも決して一面的ではないと思われる。

（注16） J. R. Malthus, op. cit. S. Bailey, "A Critical Dissertation on the Nature, Measures, and Causes of Value; chiefly in Reference to the Writings of Mr. Ricardo and his Followers," 1825.

（注17） A. Smith, "An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations," The Modern Library ed. by E. Cannan, p. 52. 大内訳(1)一〇九頁。

（注18） リカードにかんする拙稿二八頁参照。

（注19） 「剰余価値学説史」(9)一五三—五頁。

（注20） 同右(11)二二三頁。

（注21） T. Hodgskin, "Labour Defended against the Claims of Capital. Or the Unproductiveness of Capital proved with Reference to the Present Combinations amongst Journeymen," (1st ed., 1825), 1922, ed. by G. D. H. Cole, p.34. 鈴木訳二八頁。

（注22） Ibid.

（注23） A. Smith, op. cit., p. 30. 訳(1)六八頁。

（注24） J. R. McCulloch, op. cit., 2nd ed., pp. 297–9.

（注25） ここにドッブは主観的分析への移行を指摘する。M.Dobb, op. cit., pp. 141 & 142・訳一三五・一三六頁。

さて、リカードの第二の難点は、資本と労働の交換を労働価値論に基いていかに説明するかにあった。これは労働力概念が未確立であったため、労働者がうけ取る労働（力）の価値とそれが生みだす生産物の価値が異なるという事情が、労働と資本の間の不等価交換として映じたからであるが、この難点には、労働者のうけ取る労働（力）の価値は、彼が生産した価値よりも小さいというすぐれた認識がふくまれていたのである。

しかし、ミルはここでもまた、皮相的な解決によってこの貴重な認識を見失ってしまう。「生産の二要具たる資本及び労働が、二つの階級の人々に属してゐる」ことは、「労働者はそれだけ、資本家はそれだけ生産に貢献し……貨物は、生産された時、一定の割合で両者に帰する」ことを意味する。「併し生産の完成される前に、これ等当事者の一方が他の一方の分前を購買してゐるといふこともあり得よう。……事実、資本家は、彼が賃銀を支払って労働者を雇傭する時には、何時も、労働者達の分前を購買することになるのである。労働者達が、生産された貨物の分前を以って支払はれるのを待たずに、彼等の労働に対して賃銀を受取る時には……彼等はその分前に対する彼等の請求権を売却してゐるのである。」(注1)

ここには、直接的労働と資本＝蓄積労働が協働しつつ、それぞれ各自の分前を生産するというすでにみた考えが一段と明白に現われている。この三位一体的考えを基礎として、生産における労働の貢献度を示すところの労働の分前が前もって売却されるというのであるから、資本と労働の交換が商品交換と全くひとしい等価交換とみなされるのは当然であった。資本家が購入するのは労働でも、労働力でもなくて、労働者が生産した生産物（の請求権）であり、従って、資本家にあい対するのは、無産者・プロレタリアートではなくて、生産物（の請求権）の所有者である。まさに文字通り対等の・商品所有者同志の等価交換である。(注2)

そればかりではない。「貨物の生産されるのを待たず、又その価値の実現される売行の遅延とその不確実とを一切辛抱せずに、前以てその分前を受取る方が労働者にとって遙かに一層好都合である」から、賃銀制度は「当事者総てにとって最も好都合」な制度であるとされた。(注3) こうして、労働の分前が前もって貨幣形態をとる現象面にのみ注目が集中していったが、労働→賃銀・資本→利潤という立場にたつかぎり、労働者の生産した価値の一部分が労働と交換されるという認識――第二の難点の根拠――が理解されないのはむしろ当然であろう。

（注1） J. Mill, op. cit., p. 94. 訳八二―三頁。
（注2） 「剰余価値学説史」(11) 一一〇―一一六頁。
（注3） J. Mill, op. cit., p. 41. 訳三五頁。

それゆえ、彼らは資本制的私有財産制に一片の疑惑すらもたない。「資本は人間の勤労の所産である」以上正当であり、「利潤は、資本の維持と増殖とへの動機を与へるために、所有者に保証されねばならない。」(注1) 従って、「私有財産の保証は、富の生産にとって第一の、最も不可欠な必要条件である。」(注2) もちろん、私有財産制が「あらゆる人を富ませはしなかった」ことは認められるが、しかし富を獲得する幸運の差は「事物の本性」・「神の秩序」のごときものであるから、甘受すべきものとされた。(注3)

もっとも、マカロックは所有の保護を労働者の財産（!?）たる労働にも適用して、ブルジョア・リベラリストとしての責をはたそうとする。このため彼は、「個人が労働を売る諸条件を他人と協議するために団結するのを禁止されるならば、彼は奴隷であるにすぎない」(注4)として、プレイスとともに団結禁止法の廃止に積極的に尽力する。(注5) しかしこれは労資の階級関係＝対立の本質を理解したうえで、労働階級の自由を擁護したものでは毛頭なかった。団結にともなう「暴力」、「雇主の財産の侵害」、不参加者への妨害等、現秩序を攪乱するものはすべて、断乎として拒否されたし、(注6) 平和的なかぎりでの団結の容認も、団結は無効である（後述）から、禁止法の廃止は反って団結を消滅させるという考えによるものであった。(注7) 従ってそこには、階級対立の根源を理解することなく、階級関係を自然的なものとする古典学派の階級観がいぜんとして継承されているのがうかがわれよう。

ところで、かかる見解は、二四年の禁止法廃止を契機とした労働運動の飛躍的発展(注8)によって否定されたし、その後の労働運動の歴史は労資の紛争の根源が、資本制生産のもとでの労働階級の窮乏化と、ロック・アウトや「宣誓文（document）」による資本の「暴力」にあることを明らかにしていった。(注9) それゆえ、かかる段階においてもなお、階級対立の根源に目をむけない彼らは、スミス、リカードよりはるかに「罪がおもい」(注10)といえるし、実際上も、スミス、リカードにおいては前期的桎梏から（資本の）生産力を解放するという歴史的課題を担い、その意味でブルジョア的であった自由放任の主張も、この段階では貧困の放任、団結の無効を正当化する性格を強め、反労働者的性格を一段とあらわにしていったのである。

（注1） J. Mill, op. cit., p. 255. 訳二二五頁。J. R. McCulloch, op. cit., Part I, Chap. II, Sec. I, "Security of Property."
（注2） J. R. McCulloch, op. cit., p. 81. なお、私有財産を熱烈に弁明・擁護する彼らが、こと土地所有・地代に対しては、それを「自然の恩賜」と非難し、リカードよりも一歩進んで、地代が政府に帰属しても生産の発展を阻害しない（J. Mill, op. cit., Chap. IV, Sec. V.）というのは、当時のブルジョアジーの特色を反映するものとして興味ぶかい。
（注3） J. R. McCulloch, op. cit., pp. 89-90.
（注4） Ibid., p. 255.
（注5） この間の事情については、S. & B. Webb, "The History of Trade Unionism," 1950, Chap. II. 山中篤太郎「労価組合法の生成と変転――資本主義英国における政策形成の研究」増補版第一章、第三節を参照。
（注6） J. R. McCulloch, op. cit., pp. 255-6.
（注7） S. & B. Webb, op. cit., 1950, p. 109. 荒畑訳（上）一一五頁。G. D. H. Cole, "Short History," 1952, p. 60. 林・河上・嘉治共訳(1)一〇四―五頁。
（注8） G. D. H. Cole, op. cit., Part I, Chap. V, Sec. 2.

G. D. H. Cole & R. Postgate, op. cit., Chap. XX.

（注9） G. D. H. Cole, op. cit., Part I, Chap. VI.

（注10） エンゲルス「国民経済学批判大綱」マル・エン選集補巻(5)一九九頁。

さて以上のごとく、リカード学派はリカード理論の継承者と自負しつつも、実質的にはリカードから離反・逸脱していったのであるが、かかる逸脱は、古典学派の非歴史的な資本主義把握を克服しないかぎり、さけられぬものであった。けだし、資本主義の発展は一方では資本制生産の歴史的・過渡的性格を表面化したとはいえ、同時に他面では、本質的諸関係を隠蔽するフェティシズムを一段と完成していったから、労働をたんに生産一般の基礎とみなすだけでは、古典学派の遺産を正しく継承していくことは不可能となった。機械制大工業の進展とともに、労働者が機械の附属物となるにつれて、また相対的剰余価値が増大するにつれて、「直接的労働過程における労働の……生産諸力および社会的諸関聯は、労働から資本に移置されたものとして現象する」[注1]し、他方ではこの過程で増大する相対的過剰人口が、労働者を生産・蓄積の母体として尊重するスミス的見解に代って、労働者を生産にとって余計なものとみなす見解に力を与えていった。

問題は労働が生産の主体でありながらも、何故にかかる現象的諸形態をとって現われざるをえないかという点にあったし、現象的諸形態、現実的諸運動を労働価値法則に立脚して、具体的・積極的に解明していくことなしには、労働価値論の有効性を確証しつづけていくことは不可能であった。しかしながら、これは資本主義をいぜんとして絶対視するリカード学派のなしうるところではなかった。彼らに残された途は、一応古典学派から継承した労働・価値概念を、現実の「仮象」に対応して作りかえていくことでしかなかった。資本が利潤（平均利潤）を生むという仮象、資本と労働が自由・平等に交換されるという仮象に対応して、価値を生むものとしての労働概念が資本にまで拡張され、労働市場の交換は名実ともに等価交換とされ、ここに三位一体的見解がしだいに地歩をしめていくこととなった。諸現象はそれに適応させられた概念のもとに固定化され、絶対化されてしまい、そこではもはや、古典学派が準備したところの仮象を打破する手がかりすらが失われたのである。

かかる実質的変化が、「賃労働」問題の分析をいかに決定的に規定し、そこにおける具体的変化をもたらしたかは、次節で明らかとなろう。

（注1） 「資本論」(11)四一九頁。

(三) リカード学派の「賃労働」問題の分析

賃労働関係が自然的関係とみなされるならば、生産過程における

支配・従属関係が看過され、賃労働問題が分配面においてのみ把えられるようになることは、古典学派の研究ですでにくり返し指摘したところである。[注1] この点はリカード学派にも共通しているが、しかしリカード学派が二節でみたような労働把握にたつ以上、分配問題自体の解明においても、古典学派から逸脱・離反したであろうことは、当然予想されよう。

（注1） スミス、リカードにかんする拙稿参照。

さて、賃銀論冒頭で、賃銀制度を労働者の分前を前もって支払う便宜的な制度としたミルは、賃銀分析でもかかる皮相的把握をそのままうけついで、分前の量的変化のみに注目し、しかもその原因を労働市場の現象面にのみ求めていく。従って、理論的には「賃銀率は人口と雇傭、換言すれば、資本との比率に依存する」[注1]という至極単純な需給説の命題がくり返されるのみで、賃銀論の大半は人口と資本の現実的趨勢にかんする非経済学的考察にあてられている。すなわち、右の需給説の命題によれば、賃銀の改善は「資本の増加する速度を速めるか、或は人口の増加する速度を遅くするかいずれかに依るほかはない」[注2]が、実際には、人口は数年間に二倍にもなる繁殖力をもつのに反し、資本の増加＝貯蓄力は、将来よりも現在の享楽を求める性向によって制限されているうえに、長期的には収穫逓減法則による所得増加の困難のため阻止される傾向にある。[注3] ここに、「人類の一般的苦悩」の根源があり、[注4] 従って「出産数を制限する手段を見出すことが重大な実際的問題」となるというのである。[注5]

以上のごとく、ミルの賃銀論は至極単純な需給説の命題と、それに依拠した人口過剰による貧困の説明につくされているが、理論的粗雑さという点ではマカロックの需給説もほとんど変るところがない。しかしながら、このことからただちに賃銀学説史上の彼らの役割を軽視し、彼らが古典学派の分析視角を大きく転換せしめていったことの意味を見逃してはならない。

古典学派は、価値論でも、賃銀論でも、まず需給の一時的変動を捨象し、この変動が結局はいきつくところの自然率＝自然価格・自然賃銀を究明すべき分析主題とし、かかる方法を通じて、投下労働による価値規定、生存費による労働（力）の価値規定、の原理を確定していったのである。労働の生産物と労働（力）の価値との関聯、賃銀と利潤との対抗関係等にかんするすぐれた洞察が可能となったのも、まさにこの価値規定の原理が基底にあったからである。

ところがミルは、かかる伝統的方法を全く無視し、まず一定数の資本と人口のもとで、賃銀が「或る特定の点」で定まっていることを前提し、[注6] 需給の変化によってこの「点」から乖離する市場賃銀の変動のみを考察の対象とする。賃銀は「現象形態において」[注7]のみ把えられ、すべては競争＝需給の作用に帰せられた。こうして、古典学派の労働・価値概念から離反したミルは、賃銀論ではペティ以来の伝統的遺産である労働（力）の価値規定を放棄し、[注8] ここに賃銀・

ひろくは賃労働制度の本質を洞察する途を全く遮断してしまったのである。だがこれは労働概念における逸脱から生じたさけられぬ結果であった。けだし、賃銀を労働の生産への貢献度を現わす生産物の分前とみるかぎり、賃銀と（古典学派によれば労働が生産した）新価値総額との相違ははじめから問題にならないのであるから、賃銀の一時的・量的変化のみが、労働市場の競争面でのみ注目されていくのはむしろ必然的であった。

それゆえ、賃銀需給説への転換において、彼らが投下労働価値論の批判者マルサスと全く同じ役割を果したのは、単なる偶然ではなかった。もっとも、諸現象のおくに一般的・本質的なものを求めることを拒否し、現象記述的立場[注9]から価値概念を批判するマルサスでは、リカードの自然労賃は「最も不自然な価格[注10]」として非難され、需給説への転換も批判的・自覚的に行われたが、浅薄な理解によって無自覚的に労働・価値概念から脱落したリカード学派は、主観的にはおそらく賃銀論でも師リカードを忠実に継承していると考えていたのであろうが——。

（注1） J. Mill, op. cit., p. 40. 訳三六頁（賃銀論(一)項の表題）。
（注2） Ibid., p. 44. 訳三八頁。
（注3） Ibid., Chap. II, Sec. II, §2 & 3.
（注4） Ibid., pp. 45-6. 訳三九—四〇頁。
（注5） Ibid., p. 65. 訳五七頁。
（注6） Ibid., p. 42. 訳三六頁。
（注7） 堀経夫「リカァドウの価値論及びその批判史」二五三頁。
（注8） 玉野井氏「前掲書」五八頁。もっとも、マカロックは賃銀論の主題を、(1)賃銀の市場率、(2)自然率、(3)比例的賃銀、に分け、(2)をもって、「労働者を養育・維持するに十分な」額と規定する。しかし、生産困難によって必需品価格が騰貴する場合、人口停滞→労働供給減少→賃銀の自然率上昇という形で、労働需給の変化を媒介として自然率の変化を把えていることからも分るように、彼の自然率は、需給の作用から一応独立した労働の価値概念というより、市場賃銀の平均量というようなもの（堀氏「前掲書」二九八—三〇〇頁）であり、マルサスの必要賃銀（注10）にちかい。もっとも、スミス、リカードの労働の価値概念にもかかる性格が混在しており、これが彼らの労賃の本質把握を妨げたのであるが。
（注9） T. R. Malthus, "Principles of Political Economy considered with a View to their Practical Application," (1st ed., 1820), 1951, Introduction. 吉田訳(上)序文参照。
（注10） Ibid., p. 223. 訳(下)一六頁。マルサスでは、労働の市場価格が需給の「一時的原因」に依存するのに対し、「自然価格または必要価格」は「労働者の平均的需要に応ずるに足る有効供給を惹起すに必要な価格」である（Ibid., p. 224. 訳(下)一七頁）。両者の差は質的ではなく、自然価格は市場価格の量的平均という意味

しかもたない。

ところで、以上の点を一応度外視すれば、市場賃銀を自然率からの一時的乖離とみた古典学派では、市場賃銀の変動は充分分析されていなかったから、これをとりあげること自体には批判的意味があった[注1]といえる。しかし市場賃銀の分析にかぎってみても、リカード学派は、市場賃銀が資本と人口の比率に依存するという古典学派の需給説を——それのみを——一面的に継承し、それを実践的主張をふくむ固定的な需給説＝基金説のドグマに高めたばかりで、理論的にはなんの貢献をなすこともなかった。

まず、労働供給はいぜんとして人口そのものとして把えられ、労働力が人口とは異なり、さらに労働供給量は労働日、労働強度によって労働力数から独立して変化する点は看過された。それゆえ、労働供給の変動は専ら、マルサス的人口法則の作用にのみゆだねられてしまった。

他方、労働需要は「賃銀の支払いに充用される資本[注2]」に依存するといわれるものの、その部分が総資本といかなる関聯をもち、資本蓄積の過程でいかに変化するのか、という肝心の点は全く不明瞭である。資本構成と労働需要の関聯については、ミルは賃銀論以外で附随的に言及しているにすぎず[注3]、しかもそこでは問題は「固定資本の生産物に対する需要と直接的労働の生産物に対する需要との間の比率」の変化が両部門の生産量の比を変えることによって、雇用総量を変化させる、という奇妙な形で把えられている[注4]。この点、リカードとの論争を通じて機械問題への関心をふかめたマカロック[注5]では、機械導入の結果は、一応固定資本の増加による流動資本＝労働需要の減少として把えられたが、この需要減少は充分補償されうるものとみなされた。すなわち、機械は他方では(1)製品価格の下落→当該商品への需要の増加→生産・雇用の拡大（需要増加の少ない時は遊離資本が他部門に投下→遊離労働者を吸収）、(2)廉価な製品の購入による資本・所得の節約→投資の拡大→雇用の拡大、をともなう。この過程で、労働者は移動を要するが、それはきわめて容易に行われ、結局のところ彼らは機械から「つねに資本家よりもより以上の」利益を享受[注6]するというのである。この補償説によって、資本蓄積過程にともなう機械化が惹起する失業や、そこに反映された労賃の対立は否認され、ここにバートン、リカードが提起した問題は学説史上再び姿をけしていくこととなった[注7]のである。

ところで労働需給の分析におけるいま一つの重要な誤りは、資本概念の曖昧さから生じてきた。すなわち、資本が「食糧、原料、及び用具或は機械類[注8]」という素材形態で把えられたのに対応して、資本の一部たる賃銀基金が「労働者を養育し、維持するために、一国に現存する……諸商品[注9]」、つまり生活必需品・とくに食糧として把握されたことによる。まず第一に、賃銀基金が一国の収穫高とむすびつけられたことから、基金は収穫条件（季節等）に左右されるため、短期的には固定的であるという見解が生じてきた[注10]。しかもこの

固定的な基金にあい対するのは、短期的には不変の人口であり、さらにその際、労働日、労働強度、一人当り賃銀等の変化によって、同一量の（可変）資本が非常に異なる数の労働者を支配する点が看過されたから、一定の基金には一定の人口が固定的な比率で組みあわされることとなり、彼らの需給論はますます硬直的なものとなった。

他方、この基金＝食糧という理解は、労働需要の長期的考察をも限界づけていった。すなわち、賃銀が資本から支払われるといわれながらも、労働需要の趨勢が、従って低賃銀をもたらす需要の相対的不足の傾向が、専ら収穫逓減法則と関聯づけて考察され、総資本の増大に比例して労働需要が増大しないという資本制蓄積の法則の秘密が理解されないのであった。

こうして、賃銀は短期的には固定的な賃銀基金と人口の比率に、長期的には自然法則たる収穫逓減法則と人口法則とに依存するため、人為ではいかともできないものであるという有名な賃銀基金説のドグマが形成されたのである。もっとも、労働需要を流動資本＝食糧とし、供給を人口とする硬直的な需給説はスミス、リカードにもみられるが[注1]、彼らの生存費説にあってはそれがなお賃銀の労働（力）の価値からの一時的乖離を説明するという意味しかもっていなかった。これに反し、リカード学派は労働（力）の価値規定を放棄することによって、それを賃銀論のすべてとなし、一段と固定的な内容と実践的な性格（後述）をもつ基金説として確定し、広く一般に普及していったのである。

たしかに、一九世紀初頭においては、穀物法による高穀価のもとで、穀価が賃銀の実質的水準を規定する面が強かったし、高穀価による貨幣賃銀の増加が利潤を、従って資本蓄積を圧迫する作用をもっていたことも事実である[注12]。しかし、高穀価が賃銀を実質的に低下させる重要な要因であったとしても、それは決して穀物生産が直接に、賃金基金・労働需要そのものを規定することを意味するものではない。実際上は、かかる高穀価の影響のもとにも、資本主義的生産は急速かつ広汎に発展していったのであって、この事実は問題がかかる発展過程で進展した機械化[注13]と産業循環による生産・雇用の不安定さにあることをしめしていた。他方、一八世紀以来の人口の増加[注14]が労働市場を圧迫する一因となっていたことも事実であるが、供給過剰については、資本主義的農業経営の発展によって過剰化した農業労働者や、スコットランド、アイルランドの貧民が都市へ莫大な低賃銀労働力をもたらしたこと[注15]、機械による労働の単純化と都市労働者の窮迫化の過程で、婦人・児童が大量に労働力化したこと[注16]、を見逃してはならない。しかも都市工場労働者は、当時の「ヨークシャの奴隷制」[注17]のもとで、長時間労働・低賃銀を余儀なくされていたのである。低賃銀をつねに人口過剰のせいにする理論家達が、長時間労働、深夜業、婦人・児童労働の利用等によって労働市場の競争に一層拍車をかけ、労働供給を制限するはずの工場法を死文化し、十時間労働運動に頑強に反対しつづけていた資本家の動向[注18]に全く目を

むけなかったことは、彼らの見解の一面性・詭弁性を端的に暴露するものであった。それゆえ、基金説は、資本制生産の特質に起因する需給の諸事情には手をふれずに、労働市場の現象の一部をきわめて皮相的・一面的に把えたものといえよう。従って、基金説を単に理論的に検討・批判するにとどまらず、仮象にとらわれた皮相的な分析視角（前節）の具体化したものとして把握し、その点にまで批判をふかめていく必要があろう。

（注1） M. Dobb, "Wages," 1948, pp. 108-9. 氏原訳一二一頁。
（注2） J. R. McCulloch, op. cit., p. 378.
（注3） 第四章「消費」第七節「賃銀に対する租税」。賃銀論では、労働需要を規定する資本の内容は全く不明瞭であって、固定資本と流動資本の区別すらなされていない。
（注4） J. Mill, op. cit., p. 260. 訳二二八頁。
（注5） 最初マカロックは機械による流動資本の減少に注目していた（D. Ricardo's Works, Vol. VIII, p. 171）が、その後リカードの反対により補償説へと変説した（Ibid., p. 366.）。それゆえリカードの二一年の「機械論」は彼を憤激させ（Ibid., p. 388.）たので、リカードは二一年四月二五日、六月一八日、同三〇日、二二年五月七日等の手紙でマカロックの説得につとめている。
（注6） J. R. McCulloch, op. cit., pp. 189-197. この批判としては、「資本論」第一部、第一三章、第六節を参照。
（注7） 真実一男「バートンおよびリカアドウの『機械論』について（三）」（「経営と経済学」60号）を参照。
（注8） J. Mill, op. cit., p. 42. 訳三六頁。
（注9） J. R. McCulloch, op. cit., p. 298.
（注10） かかる解釈は A. Toynbee, "Lectures on the Industrial Revolution of the Eighteenth Century in England," 1927 ed., pp. 100-101. 塚谷・永田訳一四〇—一頁、A. Marshall, "Principles of Economics; An Introductory Volume," (1st ed., 1890), 1956, p. 678. 大塚訳(4)三五五頁、にみられる。
（注11） マルクスは彼らの流動資本＝生活必需品＝賃銀という考えに、基金説の萌芽を指摘する（「資本論」(6)一一五—六・一三七—八頁）。なお、タウシッグは、この点を重視し、スミスからの賃銀論を基金説形成史として考察するが、彼の分析は、スミス、リカードと基金説の相違を見逃している点で同意できない。F. W. Taussig, "Wages and Capital; An Examination of the Wages Fund Doctrine," Part II.
（注12） 北野大吉「英国自由貿易運動史」第三章、(四)。
（注13） これらについては、「資本論」第一部、第一三章、第二三章。エンゲルス「イギリスにおける労働者階級の状態」。G. D. H. Cole & R. Postgate, op. cit., Chap. XVII, "Wages after

1815." 等を参照。

(注14) A. Toynbee, op. cit., pp. 67 & 74. 訳九五・一〇四—五頁。

(注15) Ibid., pp. 67–8. 訳九五—六頁。エンゲルス「前掲書」とくに、「アイルランド人の移民」。

(注16) エンゲルス「前掲書」とくに「個々の労働部門——狭義の工場労働者」。「資本論」第一部、第一三章、三節(a)。

(注17) オスラーの工場制度に対する有名な非難。B.L. Hutchins & A. Harrison, "A History of Factory Legislation," 2nd ed., 1911, p. 45.

(注18) Ibid.「資本論」第一部とくに第八章、第一三章。M. W. Thomas, "The Early Factory Legislation; A Study in Legislative and Administrative Evolution," 1948.

ところで、以上の賃銀論の特徴は、賃銀と利潤との関係の分析にも影響を与えた。たしかに形式的にみれば、ミルは分配論でまず労働の分前を考察し、生産物の残余を利潤とし、両者の反比例関係に言及しているのであるから、リカードを継承しているようにみえる。しかし、労働→賃銀・資本→利潤という立場にたち、この分前の決定については労働(力)の価値規定を放棄し、需給論に移ったミルでは「賃銀が利潤を決定すると主張しても、利潤が賃銀を決定すると主張しても……等しく正当であり得る」(注2)ことになる。従って、分前の変化の「能動的要因」をリカードとともに賃銀とするためには、分前を規定する資本と人口のうち、人口は過剰化する自然的傾向をもつから(注3)、という全く非論理的な口実をつけねばならなかったのである。

ここにおいては労働(力)の価値は労働の生産物の大いさや需給関係から独立した要因=生存費によって規定されるため、労働(力)の価値が独立変数として利潤の変動を規制する、というリカードの「最も重要なそして彼が最も力説した命題の一つ」(注4)の意味は全く理解されていない。従ってまた、生産物価値の分割比率の分析を通じて、賃銀と利潤の関係を解明していくリカードの立場も正しく継承されない。ちなみに、リカードが必需品部門の生産力の変化→労働(力)の価値の変化→利潤の逆の変化、という系列を「厳密に定式化し」(注5)、相対的剰余価値の運動を示唆したのに反し、ミルは生産物の量的比率に注目し、生産力の増加する場合には、労働・資本ともに分前量を増大しうるということを強調するのである(注6)。マカロックでも、一応「比例賃銀(proportional wage)」の考察において、生産物価値の分割比率にかんするリカード理論が——ミルよりは明瞭に——継承されてはいるが(注7)、全体的には「賃銀率は資本量に依存し、資本量は利潤量に依存する。それゆえ、利潤が大きければ大きいほど資本は増加し、賃銀は上昇する」(注8)という素朴な調和論が支配的であり、機械の影響等についても、生産物量の増加のなかに労資の利益が一致する点が強調されるのであった。

(注1) J. Mill, op. cit., Chap. II, Sec. III.

(注2) Ibid., p. 70. 訳六二頁。

(注3) Ibid., p. 71. 訳六三頁。

(注4) 「剰余価値学説史」(11)一一七頁。

(注5) 「資本論」(3)四一八頁。

(注6) J. Mill, op. cit., pp. 72 f. 訳六三頁以後。

(注7) J. R. McCulloch, op. cit., Part III, Chap. II, (3).

(注8) A. Salz, "Beiträge zur Geschichte und Kritik der Lohnfondstheorie," 1905, S. 57.

さて、以上のごとく、賃銀は人為のいかともできないものとみなされたため、リカード学派もまた自由放任を主張するが、自由放任主義は彼らのもとではまさに貧困の放任を意味するものにほかならなかった。

まず、当時の窮乏は人口過剰の結果とされたから、ミルは出産の制限が可能となれば、オーヴェンのごとく雇用拡大のために「所得の一部を強制的にしかも残酷に取り上げる必要はない」(注1)といい、マカロックも需給の法則を考えない「一切の計画」は「全く無価値であり、無効である」(注2)として、資本が貧困救済の負担をおうことを拒否する。

他方では、賃銀を上昇させようとする組合活動は「極端なる無智」(注3)によるものといわれ、有名な組合無用論が主張された。すなわち、賃銀は「かくの如きものによっては動かし得ない原理……即ち資本と人口との比例関係に依存する」(注4)以上、ある部門でこの率以上へ賃銀をひきあげれば、資本・賃銀基金の他部門への流出を通じて、結局、賃銀下落か労働者の一部の解雇が生ずることとなる(注5)。もっとも、賃銀がこの率以下にある場合には——その時にかぎり、またこの率までの賃銀ひきあげにかぎり——組合活動は有効であるが、しかしこの場合といえども「労働者側の努力は少しもなくても、資本家間の競争によって正当の平準にまで高められる」(注6)であろう。このように、需給の関係が一切を支配するのであるから、組合が無効であるのと同様に、団結禁止法が賃銀に「何か目立った影響を及ぼしたとは信じられない」(注7)といわれたが、(そしてこのかぎりでは、禁止法への反対を通じて、労働運動を成長させるという思わぬ結果をもたらしたが)、他方では、婦人・児童労働を保護する工場法は、その費用の増加によって、他の労働者の賃銀を削減するものであるとみなされた(注8)。

それゆえ、基金説の帰結は、労働者はただ人口の制限か「利潤率の最大可能の増大」による「賃銀の最大可能の上昇」(注9)をはかるべきだということにほかならなかった。そしてこのドグマは、二〇年後半の窮乏を背景に、賃銀闘争、工場法運動を強めながら、階級的組織を拡大しつつあった労働者に対して、かかる運動の無用なることを正当化したのであって、かかる見解は世紀末にいたるまでも「興

古典学派の崩壊と「賃労働」分析の転換

論の内に停滞し、労働組合運動に対する……有産階級反対論の大部分の根底に横たわっていた」[注10]といわれている。ここに、古典学派以来の自由放任主義が新局面のもとで、しだいに反労働者的性格をふかめていったという前節の指摘の具体的なあらわれをよみとることができよう。しかしながら、階級把握という点からみれば、リカード学派はなお階級対立の危機を理解しなかったという点で特徴づけられるのであり、この点では、ブルジョア的危機意識から組合活動に対して、露骨な弾圧政策を提唱するシーニョア[注11]や、理論的には同一の基金説をとりながらも、人口抑制による貧困打開政策を積極的にうちだすとともに、もはや無視できなくなった組合運動を労資協調の方向で容認していこうとするJ・S・ミル[注12]と区別する必要があろう。

（注1） J. Mill, op. cit., p. 67. 訳五九頁。
（注2） J. R. McCulloch, op. cit., p. 379.
（注3） J. R. McCulloch, "Combinations," in the Encyclopædia Britanica 1823. S. & B. Webb, "Industrial Democracy" 1920 ed., p. 607. 高野訳七二九頁。
（注4） Ibid., p. 607. 訳七二九頁。
（注5） Ibid., pp. 608–9. 訳七三〇—一頁。
（注6） Ibid., p. 609. 訳七三一頁。
（注7） Ibid., p. 608. 訳七二九頁。
（注8） Ibid., p. 607. 訳七二七頁。
（注9） A. Salz, a.a.O. S. 57.
（注10） S. & B. Webb, op. cit., p. 604. 訳七二三頁。
（注11） S. & B. Webb, "History," pp. 139–141. 訳（上）一四三—五頁。詳細は続稿にゆずる。
（注12） J・S・ミルにかんする拙稿参照。

(四) むすび

リカード学派がリカード理論の解説・普及を使命とし、経済学の発展という点では「何の発見もしてゐない」[注1]ことは、J・ミル自身の認めるところであるし、賃銀学説史においても、彼らがスミス、リカードの理論にたいして「本質的な何かをつけ加えたかどうかは全く疑わしい」[注2]といわれている。従来の学説史研究において、彼らの存在がほとんど注目されなかった理由はここにある。しかしながら、彼らが「本質的な」「発見」をしなかったことが事実であったとしても、それは決して彼らが学説史上何の役割も演じなかったことを意味するものではないし、まして彼らがその名にふさわしい真のリカードの継承者であったことを保証するものではない。

古典学派の特徴が労働を経済の中枢にすえ、労働による価値規定の原理に基いて生産の内部的諸関聯を究明した点にあったとすれば、しかしまたその場合、生産を賃労働に基く特定の・歴史的形態として把ええなかった点にその致命的欠陥があったとすれば、古典

学派の継承者にのこされた課題は、しだいに顕在化してきた資本主義の体制的特質・矛盾の認識を通じてこの欠陥を自覚し、古典学派の労働・生産概念に歴史的規定を与えたうえで、資本制生産独自の経済的法則を究明することにあったはずである。しかしながら、新局面の成熟は一面ではたしかに資本主義の歴史的・過渡的性格を表面化し、体制認識・体制批判を生みだす現実的根拠を与えたが、同時に他面では、この洞察を困難とするフェティシズムを一段と強化していったため、資本を絶対的なものとして擁護せんとする者においては、体制的矛盾の深化は——意識的にせよ、無意識的にせよ——全く看過され、資本の支配する「普通の表象」のみが一面的にうけいれられ、それを「教理的言葉に翻訳する」[注3]傾向が強められることとなった。この先鞭はリカード学派によって与えられた。彼らのもとで、労働・資本はともに生産の「積極的な作因」となり、従って賃銀・利潤はともにこの「作因」の賃銀となった。ここに労働価値論はその本来的意義を喪失し、現象に対応した三位一体論・生産費説へとしだいに移行していったのである。

かかる変遷は「賃労働」問題の分析のうえに明瞭に反映・具体化されていった。生存費による労働（力）の価値規定。価値分解説に基く分配論の展開。両者による労賃（労働）と利潤（資本）の対抗関係の認識。この具体的成果たる機械論。……等。——スミスからリカードへと発展・充実された労働価値論固有の諸分析はつぎつぎと見失われてしまい、非歴史的な人口法則や収穫逓減法則と、それに基く素朴な労働需給論のみが、一面的に継承・拡大されていった。賃銀の数量的変化のみを対象とし、その原因を労働市場の現象的関係にのみ求める基金説のドグマは、かかる本質的変遷の具体的産物であったし、貧困の放任、労働立法や労働組合の無効性を正当化するドグマのもとで、古典学派の素朴な階級調和論が反労働者的性格を強めていったのも、かかる本質的な変遷のもつ性格の具体的反映にほかならなかった。

それゆえ、基金説への転換は単なる理論構造の変化として理解してはならない。この転換の基礎には労働価値論から三位一体論への移行があったこと、従ってこの転換をさかいとして、賃銀は労働者の生産物価値とはきり離され、その数量的変化のみが分析されることとなり、賃銀・利潤ひいては賃労働制度の本質を洞察する途が全くとざされてしまったこと——ここに基金説が賃銀学説史上に果した役割をよみとらねばならないし、ここに基金説の反労働者的性格のうまれていった根源をみいだす必要があろう[注4]。

かかるながれに対しては、一方では労働のみを生産の主体とするリカードの労働把握を復活・強調するリカード派社会主義が、また他方では部分的にせよ資本主義の歴史的・過渡的性格を指摘するラムジー、ジョーンズ達が現われるが、しかしいずれも、労働・生産の歴史的・資本制的特質の解明を通じて、古典学派労働価値論を理論的に発展・完成することはできず、従ってまたリカード学派にはじまるリカード理論の去勢・歪曲を正しく復位させることもできな

かった。しかもその後、主観的分析の導入によって資本の生産性を積極的に主張するシーニョアが登場し、主観的な労働・費用概念に基いて三位一体的な理論をより一層明確に体系化していくこととなった。従って、イギリスにおいて労働を経済分析の主要用具とする伝統が、J・S・ミルをへて新古典学派マーシャルにまでもうけつがれていったといわれる場合にも、その内容はかかる過程で、古典学派の労働・生産概念と切断されたいわゆる生産費概念にほかならなかったのである。この点からみれば、リカード学派にはじまるながれは、客観的な人間活動たる労働を生産の主体とみなす労働・生産概念の否定という共通の基礎のうえに、資本と労働が協働するという新しい概念を導入・確立し、古典学派の労働概念をいわゆる生産費概念におきかえていった歴史であったといえよう。

シーニョアがこの共通せる基盤のうえで、新しい分析用具を通じて、三位一体的な労働・生産把握をいかに積極的な形で体系化していったのか、またそのもとで「賃労働」分析がいかに変化していったのか、は次稿で詳しく論及することにしたい。

（注1） J. Mill, op. cit., p. iii. 訳二頁。

（注2） F. W. Taussig, op. cit., p. 183. しかし前にのべたごとく（五七頁注11）、スミス、リカードの賃銀論と、リカード学派以降の基金説との間の本質的な変化を無視している点では、タウシッグに同意できない。

（注3） 「剰余価値学説史」(II)五六五頁。

（注4） 森耕二郎「労賃学説の史的発展」、平実「賃金基金説と労働組合」（「労働問題研究」38号）、堀経夫「リカアドウの労賃論の批判史」（「リカアドウの価値論及びその批判史」）等、従来のわが国の基金説研究では、かかる面がほとんど注目されていなかった。

〔附記〕 この論文は昭和三二年度慶応義塾学事振興資金による研究の一部である。

W・トムスンの分配論

——資本主義批判史の展開によせて——

白井厚

一、リカード派社会主義
二、ゴドウィンとトムスン
三、全労働収益権と資本
四、協同組合主義

一、リカード派社会主義

資本主義批判の歴史は、資本の本源的蓄積と共に始まる。既に一五一六年に、トマス・モアは「ユートピア」で私有財産と貨幣のない社会を描写し、一六二三年には、カンパネルラが理想国「太陽の都」を著した。殊にモアの書は、当時の〝羊が人を喰う〟社会の批判から出発し、一つの体制としての共産主義を考えた点で、劃期的な意義を持つのである。イギリスのブルジョア革命期には、資本主義的階級分化によって没落しつつあった小生産者を中心としたレヴェラーズ、更に貧農の運動たるディガーズがそれぞれ資本に奉仕する政治体制に反抗し、とくに後者は、農村共同体にすがる復古的な立場ながらも、〝愛と正義の共同体〟実現を期待して、当時の私有財産制度の害悪を鋭く批判した。[1] 産業革命、囲い込み運動が進展した十八世紀末に至れば、土地所有の農民への影響に対してT・ペイン、J・オウグルヴィ、T・スペンス等の土地制度改革論が現われ、理性の勝利であるかに見えたフランス革命の興奮の波が全ヨーロッパをおおった時、W・ゴドウィンは、権力と財産制度の強いつながりを洞察して、社会問題の解決を私有財産制の撤廃に求めた。更に彼に大きく影響された前期ロマン派の芸術家達もまた、露骨な利害打算によって動く営利秩序に反撥し、古代のロマンスや空想の中に、〝透き通るように単純な人間関係〟を、吟い、描き、刻むことによって、反抗を表明した。従って初期の資本主義の批判は、E・バーク等の伝統主義者の感情的な嫌悪をも加えれば、資本主義の進展によって経済的基盤をおびやかされた封建勢力、貧農、独立小生産者、熟練職人、並びにその感情を反映した都市のインテリゲンチャによってなされたといい得よう。